
終わりの始まり

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりの始まり

【Nコード】

N1243B

【作者名】

蒼

【あらすじ】

幽霊になった女の子と生身の男の子のラブストーリーになるはず。

ブローグ

つい先日の話。

私、平野弥代ヒラノヤヨは夕方、部活の帰りに車にひかれた。

んで死んじやった。

なんか医者が

『肋骨が内臓に 』

とか

『腸が裂けて出血が 』
とか

滅茶苦茶うるさい。

もうダメなんだから静かに眠らせて欲しい。

ガチャガチャ

いろいろな器具がなる音がして医者が処置室を出た。
親の泣き声が耳に障る。

『うるさい。 』

そう言って目を開けた。

一瞬にしてあのやかましい音が消えた。

私は周りを見回した。

誰もいない。

見えるのはのっぺりとした学校と私の下にあるプールのみ。

私は自分の学校に来ていた。

これは私の終わりと始まりの話。

プロローグ（後書き）

初の連載です！続くかわかりませんが頑張って書いていこうと思います。感想等お願いします。

私が学校に住み始めてから数日経った。

なんだかその頃からプールにお化けが出るって噂が広まって人が寄り付かなくなった。

だから私は暇で暇でしようがない。

というか私（お化け）がここに来る人を片っ端からおどかしたのが悪いんだけど。

『暇だなー』

なんとなく声に出してみる。

出るわけではないけど。

もう死んでるし。

『ふぁーあ。』

誰かに見えるわけでもないので大口を開けて欠伸をした。

本当に暇。

暇で暇で死んじやいそう。

もう死んじやってるけどね。

私は心の中で苦笑した。

その日も私は暇を持て遊んでいた。

『ふぁーあ。』

やっぱり眠い。

死んじゃったのになんでだろう。

そんなことを考えながら浮かんでた。

キィー

フェンスの一ヶ所に設置されている扉が耳ざわりな音をたてて開いた。

なんとなくそちらに目を向ける。

どうせ用務員のじじいだろう。

暇潰し位にはなるかな。

そう思っただけの音のした方に向きなおった。
そこには男の子が立っていた。

短めに切つてある黒髪に茶色っぽい目、顔は結構整っている。

一言で言えば美人だ。

美形じゃなく。

なんか綺麗な感じ。

私は数秒その男の子を見ていた。

多分私と同じ位の年だ。

ん？けどこんな生徒いたっけか。

一応私は先日までここの生徒だった。

けどこんな子知らない。

こんな美人だったら覚えててもおかしくないのに
そんなことを考えているとふとこつちを見た。

するといきなり

ガシャン！

驚いたようにフェンスのところまであとずさった。

『なななっ
』

なんか言ってる。

こつちを見て。

？

こつちを見て？

『お、おまえ
』

男の子は『おまえ』って言った。

けど此処には私しかない。

ということとは

『もしかしてあんた、私が見えるの！？』

これから楽しくなりそう。

あの男の子に出会ってから数日がたった。

んでわかったこと。

名前・飯田緋依
イトヒイ

クラス・一年三組（前の私のクラス）

先日転校してきた。

この三つ。

この前ここに来たのはサボリ場所を探していたらたまたまここに行き着いたらしい。

『おっはよーひーくん。』

朝からここに来た緋依に愛情たっぷりな挨拶をするのが日課になっている。

『おい』

『どーしたの？ひーくん。』

そして

『ひーくんは止めろって言ってるだろ!』

こう言って怒鳴られるのも日課である。

『いーじゃん。ひーくんって可愛いじゃん。』

私は少し怒ったように言ってみる。

『いーやーだー。』

こちらも怒ったように言ってくる。

それがとっても面白くて。

つい笑いたくなってしまう。

『おい。何笑ってんだよ。』

知らないうちに顔に出たらしい。

『べっつにー』

私は笑いながら答えた。

『まあいいや。おい、あの呼び方は止めろ。』

『あの呼び方ってー。』

私は緋依が困るのを知っていながら答えた。
案の定、緋依はそう言われておろおろした。

『えーっと　だからひー』

最初の方は一応聞こえたが最後の方は聞こえなくなってしまった。

『えー？何、聞こえないよー。』

緋依が恥ずかしがっているのを知ってて意地悪する。

『だからひーくんって呼ぶな！』

顔を真っ赤にしながら言った。

『あはははっ』

それがおかしくてお腹を抱え笑った。

『なんだよ！笑いやがって。』

『だってー。』

そんな下らないことを毎日繰り返していた。

3 (前書き)

今回も読んで頂けたら幸いです。

12月

だんだん寒くなってきたある日。

『ねーねー。思っただけどー。』

私は座って漫画を読んでいる緋依に声をかける。

『んー？』

一瞬だけこつちを見上げて生返事を返してきた緋依に向かって言う。

『緋依はさー他に行くとこ無いわけ？』

『んー。』

また生返事が返ってきた。

『他にも屋上とか場所色々あんじゃん。』

『んー。』

『最近寒いからさあ学校の中とか入った方が良くない？』

また生返事が返ってくると思った。

けど今度はちゃんと私の声に応じてくれた。

『そうだけどさあー』

『そうだけど 何?』

『オレ他のところ行ったら弥代ひとりになっちゃっじゃん。』

緋依が私に向かって言った。

その目と言葉に一瞬不覚にもドキっとしてしまった。

『べっつに緋依なんか居なくてもなんともないもん。』

『そーかー?』

また漫画の方に目を戻して言った。

『そうだよ!』

ふーんって緋依が言った。

『けどさ 』

『けどさ、弥代はさあオバケなっってから、ここから動けなくなっちゃったんだろ?』

私はコクンと頷いた。

私はずっとここに縛りつけられている。

たぶんこれからも

なんでかは分からないけどプールからは外には出られない。

もし緋依がここに来なくなったら暇だし何より 寂しい。

さっきなんともないって言ったのは私のつまんない強がり。

『 しろよ。 』

緋依が何か言った。

私はびつくりして振り向いた。

『 えっ？何。 』

『 おいおい。聞いてなかったのかよ。 』

緋依は困ったように言った。

もう一度言うのは恥ずかしいらしい。

『 何か言ったならもっかい言ってよ。 』

私は緋依に言葉をうながす。

『 えーっとだから 』

言葉を濁してからもう観念したかのように一気に言った。

『 だからオレはこれからここに来てやるから安心しろよって！ 』

私は緋依の言葉を聞いて嬉しかった。

『なっ、なんでよ。』

私はついそっけなく言った。

本当は嬉しくてしょうがないのに。

『良いだろ。オレが来たと思って思ってるんだから。
えっ　なっ、なん』

なんでしょうとおうとしたら言葉を遮られた。

『だってさあ、屋上とか人いて息苦しいんだもん。
私は肩をおもいつきりおとした。』

またドキッとした私が馬鹿だった。

まあまたこれからも一緒にいられるからいつか。

私は心の中で呟いたのだった。

2月の中旬。

毎朝早い時間からやって来る緋依が今日はいつもとより遅い時間にやって来た。

『緋依おつはよー。どうしたの今日遅いじゃん。』

私は笑顔で挨拶をした。

『んーおはよう。』

緋依も挨拶を返してきた。

なんかいつもより元気がない様な気がする。

『どうしたー？元気ないよー。』

明るい調子で言った。

なんか嫌な予感がする。

『あのさ』

緋依が言う。

『なーに？』

『あのさオレ転校することになった。』

『えっ
』

一瞬緋依が何を言ったのか分からなかった。

《転校》その言葉が頭の中に響く。

『なっ、なんでいきなり　そんな　。』

私はまだそれを受け止められない。

『なんかさ、親がいきなり海外の方に転勤することになって、んで母さんもついて行くって言うってオレもついて行くことになって、だから。』

緋依は辛そうに答えた。

『なんでもっと前に言ってくれなかったの？』

私は泣きそうなのをこらえて聞く。

『オレだっていきなり、今朝言われたんだよ。』

緋依は言う。

『　　つき　　』

私は呟く。

『えっ
』

緋依にははつきり聞こえなかったようだ。

私は怒り・想いをぶつけるようにはきだした。

『緋依の嘘つき！ずっと 毎日ここに来るって言ったじゃない。なんで転校なんかするのよ！私緋依のこと好きだったのに。』

そう言った瞬間私の実体の無い体は緋依に引き寄せられた。

『オレも、オレだって弥代が好きだ。本当は転校なんかしたくない。』

そして私は泣いた。

涙なんかでないのに。

数分間泣いているとだいぶ落ち着いてきた。

『うつ ひつつ』

『落ち着いたか？』

『うん。』

私は緋依の腕の中でうなずいた。

『オレだって弥代と離れたくねーよ。』

『うん。』

『けどしょうがないんだよ。』

『うん。』

『約束破ってゴメン。』

『うん。』

私は何度も緋依の言葉に頷いた。

『ねえ。』

『ん？』

『いつ出発なの？』

私は聞いた。

『3日後。』

緋依が言う。

『すぐだね。』

私は苦笑した。

『うん。』

緋依も苦笑する。

『オレさ、絶対弥代のこと忘れないから。』

緋依は言った。

『うん。』

忘れない、私はその言葉を聞いてホットした。

それに答えたように私の体が光りだし薄くなった。

『えっ
』

緋依はびっくりしたようにこちらをみた。

『どうしたんだ？』

『分かんないけど私成仏できるみたい。』

私は緋依に笑って言った。

『えっ　だって何だよいきなり、オレは弥代が居なくなったらどうすれば良いんだよ。』

『さっき言ってたように私のこと忘れないで
』

『それだけ　？』

『うん。』

私は笑顔を浮かべた。

『それじゃあバイバイ。』
緋依に別れを告げる。

『あつ』

私はこの世から消えた。

『つておい。 あんな感動的な消えかたしてなんでまだいんだよ。』

緋依が言う。

『あははは。 なんか知らないけど気付いたら緋依の隣に居たってゆーかなんと言っつか。』

私はいきなり消えた3日後の夜またいきなり現れた。

なんか知らないけどまた緋依の隣に居れてラッキーみたいな。

私はこれからも緋依の側で終わらない恋をし続ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1243b/>

終わりの始まり

2010年11月12日20時13分発行